

テンジクダイ科コミナトテンジクダイ属魚類の 2 未記載種

○前田知範(鹿児島大学大学院農林水産学研究科)・本村浩之(鹿児島大学総合研究博物館)

テンジクダイ科コミナトテンジクダイ属 *Apogon* は、生時に赤い体色を呈することが特徴的な小型魚類である。本属については包括的な分類学的研究が十分に行われておらず、属内各種の形態の高い類似性から種同定が困難な分類群といえる。先行研究により多数の和名未決定種や学名未決定種の存在が示唆されているが、その詳細は明らかにされていない。本研究ではコミナトテンジクダイ属のうち日本産 *A. coccineus* 種群に着目し、本種群に含まれる標本を形態学的・遺伝学的に比較検討することで、各種の分類学的位置づけを明らかにすることを目的とした。

国内外の研究機関に所蔵されているコミナトテンジクダイ属魚類 101 標本(標準体長 14.2–44.5 mm)を用い、外部形態の観察と 33 項目の計数・計測を行い、各種の比較を行った。内部形態の観察には軟 X 線写真を用いた。また、一部の標本では mtDNA の COI 領域における遺伝子解析を行った。

日本産 *A. coccineus* 種群はアカフジテンジクダイ *A. crassiceps* とコミナトテンジクダイ *A. kominatoensis* のみを含むとされていたが、本研究によってアサヒテンジクダイ *A. soloriens*、リュウキュウイシモチ *Apogon* sp.、および色彩と形態的特徴が既知種に一致しない 1 未同定種 *Apogon* sp. 2 を含む計 5 種で構成されることが明らかになった。これら 5 種は胸鰭軟条数が 13 であり(*A. campbelli* と *A. kautamea* では 14)、発達した上肢鰭耙数が 1 であること(*A. coccineus* では 2–3)から海外産の同種群他種と識別される。アサヒテンジクダイは尾柄周鱗数が 16 であることで、12 である日本産本種群他種と識別された。残りの 4 種は色素分布と計数・計測値の傾向的な差異の組み合わせから識別される。mtDNA・COI 領域(594 bp)に基づく近隣結合系統樹において、日本産本種群 5 種はそれぞれ独立したクレードを形成し、色彩・形態比較の結果を支持した。*Apogon crassiceps* のホロタイプ(タイプ産地:フィジー)は黒色素胞の分布と形態的特徴が日本産標本と一致したため、アカフジテンジクダイには従来通り *A. crassiceps* が適用される。林(1938)は *A. kominatoensis* を *A. coccineus* の新参異名とした一方、吉田(2010)は *A. kominatoensis* を有効としたが識別形質には言及しておらず、その有効性には疑問が残されていた。本研究で *A. kominatoensis* のホロタイプ(千葉県)を観察した結果、発達した上肢鰭耙数が 1 であることで、2–3 の *A. coccineus* と識別され、その有効性が確認された。リュウキュウイシモチには従来 *A. indicus* が適用されていたが、Yoshida(2018)は根拠を示さずに本種の学名を未確定として扱った。一方、本研究によって真の *A. indicus* も日本に分布することが明らかになった。未同定種 *Apogon* sp. 2 は Yoshida(2018)においてコミナトテンジクダイ属の一種 2 とされたものと色彩が一致するため同種であると考えられた。しかし、本種についての記述は非常に少なく、その詳細は不明であったため、リュウキュウイシモチと未同定種について名義種の検討を行った。その結果、*A. coccineus* 種群には上記で比較した 6 種以外の名義名は知られておらず、それらと形態的に識別されるリュウキュウイシモチと未同定種は適用すべき学名のない未記載種であると考えられた。